

常に日本語がうまい。「興安軍官学校顧問の日本人金川？さんを知っているか」註、(今顧問の名前をどうしても思ひ出せない事をお詫びする)と聞いた。又「貴方の経歴を詳しく書いて下さい」と紙とペン・インクを渡し「穩さず全部書いて下さい。監房の中でよく考えて、急ぐ必要はないから」とつけ加えた。私は又、「外蒙で完全に刑期が終つたのにどうして看守所に入れたか」と尋ねた。彼も前の男と同様に、「貴方達が早く書いてくれれば、それだけ早く出所が出来ますよ」という。私は「今、神経痛で腰が痛くて困るから、一時間でもいいから日光浴をさせてくれ」と頼むと「宜しい、看守長に話しておこう」。私は、「もう一つお願いがある。日本に手紙を出す事を許可して貰いたい。」「それも宜しい。すぐ書いて看守長に提出すればよい」と私の希望を入れてくれた。私は直ぐ手紙を書いて、某科長に渡してくれる様に看守長に頼んだ。頼むと看守長はこの科長に渡したようであるが、帰国後この手紙が日本に着いていない事がわかつた。どうもこの科長が出鱈目な許可を与えておいて、没収したものである。又日光浴も一日一時間づつ許可して貰つてあるから外へ出して日光浴をさせると看守長に頼んでも「部屋の中で日光浴をしないさい。病気が治るまで仕事はやらなくともよい」と答えるだけだ。当時私は外蒙で死ぬような病気をした経験があつたので、余り悪くならない内に日光浴をしたら、そう悪くならず済むだろうと思つたからである。尚、その当時は毎日麻紐を作る事に追はれていた。未決監にいて仕事をする事は考えられないのだが、この看守所ではどの監房でも仕事をやつていた。

初めは非常に鄭重に取扱ひ、食事も割に良かったが、一月月たち二月月過ぎると食事も悪くなり量も減らされて来た。仕事もさせられるようになった。わえわれは仕事を割り当てられる迄は、看守所の書籍を借りては一日中読んでいた。退屈まぎれに漢文を読む事が楽しみであつた。本の内容は、大地主反動分子の肅清、毛沢東の革命遂行の過程、世界の民主主義国家の動勢、日本の現任等、全く外蒙ではこんな本は見られなかつたが、中共へ来てからは日本の状勢も大体見当がついたし、又中共の政治の動行も或る程度見当がつき、大きな批判力を持つ助けとなつてくれた。われわれの監房の窓からは外の様子が非常によくわかつた。特に李さんが軟禁状態にある事はわれわれにとつて一番心配の種であつた。子供達が庭で遊んでいる姿も見えた。又李さんが便所に行くのもわかつていた。だが九月一日の中共建国記念日に、突然何処か家族共連れて行かれた。それからは一層淋しくなつた。特にこの看守所内に足に重い鉄の鎖をつけられた者が二人いた。ガチャガチャと鉄の鎖を引きつづて行く音が良く反響して聞えて来たし、彼等が労役している姿を窓から見えることもあつた。又便所は朝と夕方二回だけあつたが、監房内に小便の壺があつたので助かつた。その後われわれの部屋にCさんもSさんも来て、日本人が一緒になつたので一層

力強くなつた。暫くしてから今度は、満州旗人の某が足腰が不自由でわれわれの助力がなければ歩るけない状態で押し込まれて来た。彼は四平街附近の満州旗人で、蒙古語も日本語も中国語もよく出来る男だつた。彼は奉天の陸軍軍官学校の卒業生で、満州国軍の中堅幹部として働いていた。その後国民党と八路军との戦争で北京に逃亡して商売をやつていた。処が、北京も解放されたので、遂に逮捕されて看守所に投獄された。これも一年余りて釈放され、中共政府に勤めるようになった。処が今から二年程前に再び逮捕され、王爺廟、張家口、綏遠と看守所廻りをさせられ今日に及んだと言う。彼は一週間に一度位づつ呼び出されるのだが彼の言によりと診断治療のためということであつた。だが彼の態度には不審の点が多かつたので、われわれは「彼がいる処では口を慎むこと」と約束した。

私共はこの看守所で自分で書いた調書を三、四回取られた。十月の中旬頃四人とも荷物を持つて出てこいと突然呼び出された。さては帰国到来と、預けてあつた荷物も一語に貰つて一台に二人づつ乗つて出発した。きつと綏遠駅に連れて行くだろうと思つたのに、労働改造のため綏遠監獄に投獄されてしまった。驚ろいた事には、外蒙古にいた同囚の内蒙古人が二百名近く、同監獄で労働改造と洗脳教育を強制されているではないか。彼らもよもや外蒙を出たわれわれが又こんな処にやつて来ようなどと考へてもいなかつただろうし両方でお互いに驚ろき合つた次第だ。彼等は皆日本との関係で罪を問われた者達だから日本人の行末には細心の注意を払つていた訳である。

中共では日本の反動分子を根掘り葉掘り、風潰しにしてやろうとかかつたに違いない。前に「私を訪ねる人々」でも書いたように、外蒙と中共は秘密裡にこの計画を立てて実施したものと考へられる。

この監獄では生産競争と洗脳教育が厳しい。私は一年一月程こゝに押し込まれていたが、心身ともに疲れ果てて、神経衰弱になりかけていた。この監獄では支那靴、労働服、棉服、麻紐、支那布団、シャツ、ズボン下等をつくる。すべてが分業である。私らの仕事は支那靴の靴底縫いであつた。これは、一般家庭から供出したボロ布を糊ではり固、この板を靴底に裁断して、麻紐で半足一、二〇〇回縫ひ込み固い靴底にする仕事である。一日少しの無駄もなく働いて一足出来れば上上であつた。

一日の日課表(春から秋迄)冬期間は食事は二食となる労働時間は変りない。

午前五時半 起床、便所、朝会、歌合唱又は批判、洗面

朝食

七時 労働、中間十五分休憩(便所)

十二時 食事 (便所)

十一時 労働中間十五分休憩 (便所)

五時半 食事、便所、学科復習

七時 学科、討論、批判、幹部の講演

九時 便所、点呼、就寝

九時半

食事は満腹する程食べた。蔘麵に塩を入れて湯と一諸に食する物、蔘麵を麵条子にしてふかした物に野菜を入れた塩味の強い汁、たまたま白米(粗悪で粘り気のない御飯)以上は上等の方で毎日食えない。粟飯、饅頭が常食である。この食事は中共一般住民の中流家庭の食事に相等すると幹部は言っていた。

建国記念日や中秋節等には少量の肉汁に白麵饅頭が特別支給される。

休日は月二回である。この二回とも午前中は衛生掃除、身体衛生、理髪、湯又は水で身体を拭く。入浴場はない。洗濯、衣服の修理等も行う。午後からは幹部の講演、夕食後は学習となっている。

宿舎は一坪当り四、五名から五、六名、全く横になつても入れない位ぎしぎしに押し込まれている。みんな板敷かカンである。点呼後は入口に錠が下ろされる。夜は監視兵が絶えず巡回して来る。錠を下ろした部屋に各一個又は二個位の小便桶が備え付けられて、夜はこゝで用を足す。下痢患者もそこでやる。急病人の場合は宿直員か監視兵を大声で呼ぶと、囚人医者が診断してくれる。

この部屋で作業もやり、又学科、討論、批判も行われる。

学科、先脳教育は、教化教育係長幹部がいて、一カ月四、五回講演する。それも男女囚を庭に集めてやる。原始時代から革命に到る経過、

中共の現段階に於ける資本家地主等の進み方、将来への国営にする段階、農事合作社の公営から国営、生産増強、

服務規定、衛先、食事及衣料の節約 自分の犯した罪を心底から認める等全く一ときの休みも与えず無理矢理に押しつけてくる。このような講演の後、各部隊各班毎に討論、批判会が実施される。この討論、批判会が一番恐ろしい。同僚の欠点をあばき、その人の犯した罪をあばきして討論される時は全く気狂い沙汰である。こうせねば生きては行かれない。又釈放もおぼつかない。刑期は何年も決まっていけないが、この洗脳教育が身に沁み込んで、実際に立派な共産主義者と見做されなければ絶対釈放されない。若し、反動言動を行った場合は、死刑、加刑独房監禁、鉄鎖の足枷等の罪が科せられる。年に一回の表彰懲罰大会が行われる。それも誠に嚴重な警戒のもとに開催される。なぜ自動小銃を持った兵隊が警戒して表彰懲罰大会を実施せねばならぬのか。

まず一方に各部屋毎にヌビーカーが取りつけられて、監獄長から前もって表彰懲罰者の発表がある。死刑、加刑、独房監禁、足かせ、訓戒等はもう前もって行われてしまっている。釈放、減刑、表彰等の発表が大いに宣伝される。囚人達はこのヌビーカーから漏れる一言一言を戦々競々と聞いている。終つてから庭内に男女囚を全員集めて表彰大会が実施される。公安部から係の科長その他が出席して訓示から初まつて表彰式が行はれる。賞品授与も行はれる。医療については囚人医師が二人で当っている。囚人数六、七百名はいるだろう。患者数は非常に多い。医療品は日本の薬品もあるし、中国製のものもある。重病患者は入院出来る。それも一間房子に七、八名押し込まれている。同囚達の中から釈放された者も出て来た。それは外蒙で刑期が完了、今迄何カ月間かこゝに投獄されていた者達であつた。この監獄内には色々の者が入つて来ていた。無期刑、二十年、十五年、十年、十年以下に至つていた。その中でも無期刑の多いのに驚いた。彼らはその刑期を人に言わないのが通例だが、たまにはこつそり打明ける者もいた。南方広東人もいた。上海人、雲南人、満洲旗人、山西、山東、河北、内蒙古等から集つていた。閩錫山の部下もいた。

中共では何処へ行つても、労働改造所がある。これは囚人の強制労働所である。

一九五五年十月八日私らの分隊長ソルジャツプが「お目出度う」と人民日報を差出して見せた。そこにはわれわれ囚人の名前が出ていたが、特に戦犯という字が目についた。翌九日午後監獄長代理から正式に「釈放し中国紅十字会に引き渡す」との通告を受けた。十日朝、同監獄から、幹部綿服、支那靴、綿の入つた帽子、寝具一組を支給された。監獄長代理に連れられ特賓館に行き、そこで中国紅十字会に引渡され、小使錢三〇元を支給され、食事輸送宿泊費は紅十字会で支出してくれた。この特賓館は二階建て立派なものである。こゝで二泊の後天津に送られ、天津飯店に一カ月滞在、塘沽港に停泊中の興安丸に乗り込んだ。これで生れて始めて解放された自由を味わつたの

である。それから一路祖国日本へと向う気持は何とも形容できない。九州の青い山が見えた時には感涙と共に大声で萬才を叫んだ。舞鶴で十年四カ月振りに家族と再会、確かり抱きしめて泣いて喜んだ。

